

FSCN discussion paper (社会文化形成ディスカッション・ペーパー)

No.13-1 (2013年10月2日発行)

グルントヴィと デンマーク型知識社会

小池 直人

(2013年3月27日、法政大学市ヶ谷キャンパスでの唯物論研究協会北欧
社会研究部会での報告)

名古屋大学社会文化形成研究会(FSCN)

The Association for Studies in Formation of Society and Culture
Nagoya University

名古屋大学大学院情報科学研究科

E-mail: nakoike@is.nagoya-u.ac.jp Tel/Fax: +81 52 789 4840

グレントヴィとデンマーク型知識社会

はじめに

ご存じのように、二〇世紀のデンマーク社会は、一八九九年のいわゆる「九月合意」を基礎に、資源再配分を核とする協議経済や協議政治、さらには「社会民主主義レジーム」(エスピン・アンデルセン)分類される普遍主義福祉国家を発達させてきました。私が今日のお話で問題にしたのは、このような近代デンマークの制度的進化には、いわゆる「先進国」の近代化とは異なる独自の知的背景があるという点です。もちろん、この国にも近代科学は高度に発達していますが、合理的、科学的思考が一次的にヘゲモニーを行使しているわけではありません。デンマークが昨今「幸福度世界一」との枕詞を授かっているのも、むしろ、科学的分析的な知と直観知との二次元が対抗しつつ相互作用するかたちで知的世界を形成し、歴史を「共通の最善」(det fælles bedste)、あるいは「良い社会」(det gode samfund)に向けて進化させてきた結果だと思ふのです。このことから今日のお話では、とくに後者の、社会に深く根差した直観知「生の啓蒙」(Livs-Oplysning)に注目します。じっさい、この知は具体的に「民衆・国民的啓蒙」(folkeoplysning)ともいわれ、制度的には一九世紀のフォルケホイスコーレを起点として生まれ、多種多様な生涯教育や社会教育に拠点を拡大し、それにとどまらずに、狭義の学校教育にも、広く社会団体、文化団体の一般的慣習にも浸透しており、いわばデンマーク型知的慣習となり、生形式になっている気がします。生涯教育の世界では、現在その知が「実質的諸能力」(reale kompetencer)として、①具体的知識、②しっかりした技能、③目に見えない能力(発想、洞察、協力、信頼性、健康・・・)として、まさに生きていく具体的な力の総体としてとらえられているようです(DFS 2011)。私見では教育であれ、福祉であれ、失業対策であれ、脱原発であれ、環境保護であれ、・・・あらゆるデンマーク的現象を理解するさい、この知の存在論の解明が鍵だと思えるのです。

とはいえ、この面で私の研究はまだ端緒的で、誤解や錯覚が多々あると思います。このことはお含みおきいただきたいのですが、日本ではこれからの研究分野という点に免じて、ご寛容もお願いしたいと思います。

さて、一九九〇年代から二〇〇〇年代のデンマークの労働市場政策にかかわって、「柔軟保障(フレキシキュリティ)」(flexicurity)ということばが喧伝されてきました。それは一口には、主に寛厚な福祉制度を活用しながら、流動化の度合いを高める労働市場を調整するとともに、積極的労働市場政策を導入してグローバル化のなかでの国際競争に対応しながら、しかも人間的な生活を維持する政策の制度化ということが出来ます。そのさい、制度は三つの支柱、いわゆる「黄金の三角形」によって形成されたといわれています。つまり、①柔軟な労働市場、②手厚い公的福祉、③職業訓練及び教育の制度が織りなす三角形なのですが、ここで私はこの制度について詳しく論じることはしません(小池 2011)。問題はデンマーク史の径路のうえにこの「三角形」が自然な仕方発達進化してきたことであり、とくにその際に、ディーストな教育や訓練に長い伝統と哲学があり、それが貴重な社会的、文化的、政治的資源を、さらに経済的資源さえ供給したことを問題の俎上にあげたいのです。

別の述べ方をしましょう。これまでも北欧の高度な生涯学習社会は知られてきました。しばしば今日ではそれが知識情報化社会とも表現されているようですが、しかし、この社会の知の核心は、

私たちが通常イメージする知、多かれ少なかれ合理的な近代知とは異なります。市民や住民が寸暇を惜しんで猛勉強しているといったイメージでとらえるなら、甚だしい誤解になると思うのです。むしろ私たちがイメージする「猛勉強」は人々を競わせて頭でっかちにし、人間関係を寸断し、崩壊に導く危険と隣り合わせです。失業対策でも、若者の就業支援でも、高齢者や障害者への対応でも、このイメージは冷酷な自立・自己責任論に親和的であるように思いますが、先の知はむしろディーストな、幸福を感じられる社会の実質として積極的に機能しています。これは近代的理知とどこが違うのか、その解明はデンマーク社会の思想的解明にとって、また私たちが探究すべき知識情報社会にとっても本質な課題といえます。こうした問題意識から、ここではデンマーク型知識社会の哲学的基礎に接近するために、私はN・F・S・グルントヴィ(N. F. S. Grundtvig, 1783-1872)の啓蒙思想とその果実をめぐって、幾点かをお話したいと思います。グルントヴィほどデンマークの近代社会国家形成に大きな影響を与えた思想家はいないとしばしば指摘されます。それは、彼の思想が高度に飛躍した科学でも純粹哲学でもなく、たんなる実感信仰でもなく、民衆の生活から深く汲みながら、それを助けて「アート」(Art)として一歩前へと知を組織化し、生活を形成する「第一次的ロゴス」としての人類学(アントロポロジー)だったからと私は思うのです⁽¹⁾。

一 架橋の知としての「生の啓蒙」

ところで、近代はしばしば啓蒙の時代といわれます。周知のように中世には寺院が信仰という形式での知のセンターでしたが、それ以後、人間理性が知の中心になり、学校制度が世俗化されて、世界中に普及しました。それはしばしば、理性の光で暗がりやを照らし出すといった意味で「啓蒙」のことが用いられると思います。こうした、理性的な啓蒙の哲学的端緒にかんしては、「われ思うゆえに我あり」(『方法序説』)として理性的自我の原理を宣言し、明晰判明な分析知の方法を提唱したフランスの哲学者デカルトを忘れることができませんし、一八世紀西欧の「啓蒙の世紀」を思い起こします。また哲学者カントが啓蒙にかかわり、理性あるいは知性を後援者なしに「自身で用いる勇気をもて」(『啓蒙とは何か』)と語った知の自立論も、今日なお大きなインパクトを与え続けているといえるでしょう。いずれにしても、啓蒙と呼ばれる近代知とその普及は外観的なものであれ、内省的なものであれ、個人の理性的自我を起点に分析的批判知を展開し、概念的、数量的、記号的把握による精密化を進めていきます。したがって、この知に基づく学校が世界中に普及することは個人化と知的分化とが促進されることと同義です。これは私たちが日々実感していることでもあります。

しかし、ここで大きな問題に突き当たります。信仰からは与えられた外的世界全体を神の被造物として受け入れる知的態度が出てきますが、啓蒙によってはこれとは逆に、世界は細分化され、試験によって吟味される懐疑の対象になります。正確な事象は自我によって主導的に点検され、多かれ少なかれ構成されたものでなければなりません。したがって、このことは伝統的共同体や所与の国家が懐疑の対象となり、それらのもつ絆が切り裂かれることを意味します。西洋近代史の脈絡で、もっとも象徴的な事件はフランス革命だったといえるでしょう。この革命では革命か反革命か、進歩か反動か、敵か味方かといった二択がきわめて先鋭化されたかたちで突きつけられ、それが人々を分類・排除するイデオロギーの手段となりました。それはたしかに、近代化や封建的抑圧からの自由という面で巨大な意義をもっていたことはいまでもありません。ただし現時点で見るとかなり深刻な問題性も同時に浮き彫りになります。たとえばフランス革命が、さらに後にはロ

シア革命がもたらした直接的帰結はまさしく、ヘーゲルが「絶対自由」として批判したような純粋な否定性の狂乱、独裁とテロルによる社会的紐帯の徹底解体だったわけです。ここでは、すべてが理性的単位として構成された諸要素の機械的合成物にすぎません。それは生きていませんし、血も心も通っておらず、暖かみ也没有。まさしく非人間的な世界です。グルントヴィが近代史の径路にあつて憂慮し、非難の対象としたのは、このような合理的近代知の機械的形式であり、またそれを生み出した古代ローマ以来の知的、学問的慣習です。彼が「浅薄な啓蒙」とか「ローマ・イタリアの学問(慣習)」と呼ぶのは、このような知的慣わしのことだったのです(グルントヴィ 1832)。

ご承知のように、こうした合理的近代知の普及拡大に反発する知識人たちはロマン主義の潮流をかたちづくりしました。それはスピノザ哲学に淵源があり、疾風怒涛時代のドイツがその坩堝として知られるようですが、北欧との関連で重要なのはH・シュテフェンスを介して導入されたシェリング哲学です。周知のように、シェリングはフィヒテの絶対我と同等の活動性を自然にも認め、精神および自然の総体を「絶対的同一性」として一瞬に把握する知的直観の哲学者になっていきます。彼はじつにこの直観を天才的なものと解し、教育によって伝達普及することは全くの無駄としました。つまり、知的活動から分析的思考を基本的に解除して、「一にして全」をとらえようとするのですが、この点に、反啓蒙の特性がよく現れているといえます。グルントヴィは従兄弟でもあるシュテフェンスが一八〇二年から三年にかけて行ったコペンハーゲンでの哲学講義の聴講がきっかけになって、シェリング哲学から強い影響を受けました。私の印象では、シュテフェンスは電磁気の研究などで知られる自然科学者でもあり、彼の哲学講義では、シェリング以上に経験的原理に位置を与えており、その分「絶対的同一性」といった思弁の原理は後景に退いているように思えます。印象論ですが、この著作は実証科学を踏まえ、単純な無機的世界から有機体を経て人間の独自世界にまで及ぶ自然史的過程の総体を把握するのです(Steffens 1905)。このこともあって、グルントヴィはシェリングとは離別しても、シュテフェンスを学問の師と仰ぎ、ホイスコーレの知の生みの親としています(Grundtvig 1832, 1839)。

こうして「生の啓蒙」は時代の趨勢となった合理的啓蒙主義からも、ロマン主義からもともに距離をおくポジションを定めることとなります。この独自の啓蒙は、信仰でも、科学的分析知でもなく、彼のいい方を借りると「モーゼ・キリスト的直観」、「歴史・詩的直観」等と規定され、人知として派生するのです。以上のことを図式的に言えば、「生の啓蒙」は一方で分析的科学的な要素論、他方では思弁的全体論、換言すれば合理的啓蒙とロマン主義とに対抗し、かつそれらとの相互作用と意義づけられます。ここでは細かい注解は省き、大枠だけお話しさせていただきます。

たとえば、グルントヴィのオリジナルとなるホイスコーレの構想を考えてみましょう。彼は一八三〇年代から四〇年代にかけて、彼の名を最も著名にした構想を次々に論じました。それは一方で市民的ホイスコーレの構想であり、他方で「北欧大学」すなわち学問的ホイスコーレの構想です。ここで後者の説明は省きます。前者の市民的ホイスコーレですが、それはソーアというシェラン島の小都市にあった騎士のアカデミーを、一八三一年にデンマークで設立された身分制地方評議会を、ひいてはデンマークの議会制度そのものを担う主体形成のための学校へと改変しようとするものでした。これが「生のための学校」(Skolen for Livet)、つまりデンマーク語ホイスコーレの原像だったのです(Grundtvig 1838)。それは、先に述べた「北欧大学」、すなわち「快のための学校」(Skole for Lyst)と区別されるのですが、知的には、後者が理論的認識(エピステーメ)を扱うのたいして、前者は実践的思慮(フロネーシス)に比すべき知を扱います。しかし、面白い

ことに「生のための学校」はたんに「生の学校」としての実業学校ではなく、また物質的生活から遊離した政治的市民の教養や徳を学ぶ場でもなく、人間の市民的形成の学校ですが、それは職業を含む具体的な生の技芸と経験を基礎に、それらを市民的政治的知見や学問、人類史の経験との相互作用のなかにすえて、所与の生の到達点を、真理と倫理、美に向けて前進的に発展させるための制度と意義づけられていることです(Birkelund 2000)。したがって、ここでは日常生活と学問、職業とヒューマニティー、ハートと頭脳、エロスとロゴス・・・がふれあい浸透する場であり、一般庶民(当時の大多数は農民)と、教師や聖職者、法律家、官僚志望者等々がともに同じ範疇で括られる「民衆的国民」(Folkelighed)として、共同市民として、母語による「生けることば」(det levende Ord)を最高のメディアとして交わり、自己の市民的アイデンティティーを自覚する場だったのです。

この結果、グルントヴィのホイスコーレ構想は、ラテン語文化やドイツ語文化に基づく学校への激しい批判と、デンマークの①国王と②民衆、③祖国と④母語の「四つ葉のクローヴァー」の「えこひいき」と自ら認めるようになりました(Grundtvig 1836)。こうして、グルントヴィのホイスコーレ構想ははっきりと、シヴィックでエスニックなナショナリズムの立ち上げを企図するものでもあったのです⁽²⁾。この連関は複雑なものです。そこには小国国民国家の本質を凝縮する意味があると思われます。デンマークは当時周囲を帝国主義諸列強に包囲され、とくに拡張主義期のドイツに隣接し、独立と主権の維持はつねに焦眉の課題であり、政治的求心の原理をなしていたと思います。この問題は現在でもすべて消え去ったわけではありません。この求心の原理が実質的に機能するさいの近代知の質、啓蒙の質が問われたわけです。

ともあれ、グルントヴィは民衆・国民的な大同団結のために、大まかにいえば、インテリ教養層と庶民大衆、ラテン語と母語に分離した二元的知識世界を、後者を基本に、つまり「下から」徹底架橋しようとする。このことは一九世紀の民主化を主導した教養市民層からなる国民自由主義(national Liberalisme)の路線と対立しました。後者は大まかにヘーゲル主義であり、「上から」の新人文主義による国民統一と啓蒙をめざし、また市民教育を組織しました。グルントヴィはこれを不可能として、フォルケリ・ホイスコーレを下からの「民衆的国民」主体の立ち上げの知的拠点にしたのです(Grundtvig 1871)。この質の知、つまり近代市民の知であり、「民衆的国民」の知の構想は、グルントヴィ派の農村のホイスコーレに具体化され、都市労働者の啓蒙団体、女性団体の啓蒙をはじめとして、石ころを投じて水輪が広がるように、ホイスコーレの枠を越え、狭義の学校にも、生涯教育にも、諸団体の知的原理にも、協議社会といわれる多様なコーポラティズムの諸形態にも拡大普及しました。その成果といえるものを挙げれば、一九世紀末の福祉立法や「九月合意」といわれる労使妥協、「国民のためのデンマーク」とされる福祉国家形成、ナチス・ドイツ占領下の国民的抵抗、近年では一九八〇年代の福祉国家危機の克服のために国民的戦略、さらにフレキシビリティの政策などなどがあるといえます。つまり、この知は近代社会・国家の生成を主導し、今日では多かれ少なかれデンマークの社会諸制度全般に埋め込まれたものであり、「デンマークらしさ」(Danskhed)あるいはデンマーク的性格をなしていると思われます。グルントヴィはこの知を神話的形象であるヘイムダルになぞらえました。ヘイムダルは光(知恵)の神であり、じつに神々の世界と人間界とを架橋する地点、いわば神的叡智と人間的英知を架橋する地点に住んでいたとされるのです(Grundtvig 1839)。

お話をグルントヴィに戻します。こうしたことから、グルントヴィはこの「生の啓蒙」を「より根底的な啓蒙」として「浅薄な」理性の啓蒙から区別し、絶対王政以後に発達すべき市民社会、国民社会

の組織原理の核にすえようと考えました(Grundtvig 1834)。かりに「浅薄な啓蒙」である理性の啓蒙が中心なれば、市民社会は徹底した業績原理、メリトクラシーの原理によって編成され、私たちがよく知るように序列や格差に満ちたものとなったでしょう。しかし、生の啓蒙は、知識の光源を太陽と見なし、人間理性の光を夜輝く、星々や街灯の光のようなものと考えました。このことは「啓蒙」と題される詩で次のように象徴的に詠われています(Grundtvig 1839)。

光は天の恵みなのだ
太陽は農民とともに起きて昇る
学者たちとともにではない
太陽はつま先から頭のとっぺんまで最良に照らす
外で働く者をいちばんに

また、コペンハーゲン郊外にあるマリエリュストのグルントヴィ・ホイスコーレの開校に寄せた「陽光は漆黒の土を照らす」(Grundtvig 1856)と題される詩は、

太陽の輝きによる、漆黒の土への贈り物は
真の啓蒙による土の縁者たちへの贈り物に等しい

ということばではじまります。これらのことからいえるのは、しばしば誤解されるように大地や民衆そのものに知の光源があるわけではありません。その面ではたしかに、「浅薄な啓蒙」のいうように理性の光を放つ(科)学者の理性の方がまだ少し明るい。ですが彼ら民衆は太陽とともに暮らしています。太陽の光に照らされた自然界に馴染み、そこから多様な知を経験的に吸収している「外で働く」民衆には、光と暖かさが自然に備わります。この面で彼らの知的光源は教養市民層のそれを圧倒するのです。むしろ後者の理性の光はそれ自体単独では「墓場」のように暗く冷たい。だからこそ、教師や聖職者、官僚候補生がフォルケホイスコーレで「外で働く者」と交わり、自らの無知を知ること、自然の光と暖かさを得ることが課題だったのです。

じっさい、デンマーク史の展開では、とくに対独戦争の敗北以降、デンマークの教養市民層の失意と知的真空状態の出現のなかで「生の啓蒙」の知的ヘゲモニーが生まれます。それはまず農村の社会経済、文化のなかで、後には都市のそのなかで展開し、理性の啓蒙と相互作用しながらも、近代社会(市民社会)を通例とはかなり別様に編成したといえます。①自由と個性の尊重、②平等主義、③共同・包摂といった近代的な諸価値の実質化の運動によって、市民相互はもとより、教師と子ども、医者と病者、介護者と被介護者、資本家と労働者、当局と市民……の関係調整や知的伝授は「生ける言語」を、すなわち母語を中心メディアとしつつ、協議社会といわれるほど多様な仕方で制度化されるネオコーポラティズムのシステムを発達させてきました(Raffnsøe og Pedersen 1993; Campbell et al. 2006)。このことは社会制度全般が多かれ少なかれ、官僚的合理性、あるいは文書处理的理性の「冷徹さ」だけでなく、しばしば一般民衆に見られる心(ハート)の暖かさを得ることになったのです。

ご承知のように、ドイツの哲学者、ハーバーマスが社会的調整メディアとして貨幣(市場)と権力(国家)に対置するかたちで、言語的相互行為をあげ、そこに歪曲されたコミュニケーション状況の克服を託したのですが、グルントヴィもまた、ハーバーマスから百年以上前に、彼と類似した主

張を行っていました。その意味では先駆者でした。ただし差異についていえば、ハーバーマスはやはり理性主義者ですが、グルントヴィは詩人であり、想像力を巧みに駆使し、あくまで制作的・コミュニケーション的ですから、ハーバーマスのような生活世界とシステムの二元論をとらず、むしろ両者の架橋をめざしました。とはいえ、このことは別途論じるべきことですし、まだ私の力量には余ります。いずれにしても、一九世紀のイギリス、二〇世紀のアメリカが資本主義の実験場であり、二〇世紀のソヴィエト・ロシアが国家型社会主義の実験場であった、これらがすべて近代科学的な実験室であったとすれば、デンマークはおそらく他の北欧諸国とともに、架橋の知としての「生の啓蒙」の実験室、換言すれば共同社会（その物質的基礎としての普遍的福祉国家）の実験室に喩えることができるのではないのでしょうか⁽³⁾。この点の解明を、今後グルントヴィ研究と平行して進めたいというのが私の抱負です。

二 信仰と直観

さて、このように大づかみで紹介したグルントヴィの啓蒙知の性格を、以下ではポスト宗教性、常識的性格、歴史性の三点から、全く不十分なものですが、やや各論風にお話ししたいと思います。

まずは宗教的信仰との関係です。グルントヴィは職業的には真摯なルター派の聖職者であり、「生ける教団会衆」の原理によって、当時の合理主義神学の旗手H・N・クラウセンと正面から対決し、十年ほどの著述検閲の裁定を食らうなど、終始宗教的思索とともにありました(Koch 1959)。私には、この方面での彼はまったくブラック・ボックスなのですが、彼が聖職者であるだけでなく、支配的宗教の批判者、信仰覚醒運動の一指導者であるとともに、知の世俗化の推進者でさえあったことはたいへん興味深いものがあります。

ところで、北欧型近代化はルター派プロテスタンティズムと密接にかかわります。公的福祉の制度的発達はこのことを物語ります。一六世紀以来の宗教改革は、教会と国家の関係を逆転させ、教会が絶対主義国家支配の道具の役割を担うことに転じました。大陸ヨーロッパやイギリスではカトリックとプロテスタント諸派が入り乱れて宗教紛争を繰り返しましたので、社会福祉制度はかなり複雑な様相を呈します。しかし、北欧ではルター派が圧倒的でしたから、結果としてルター派の本領が発揮されたといえるでしょう。この点で重要なのは、国家と聖職者の役割です。北欧の絶対王政は宗教改革の帰結ですが、教会財産を没収することで国家の権力基盤を強化し、さらに教会を手足として利用することで支配の社会的基盤を構築し、中央集権的支配を領土の隅々にまで貫徹することができました。一七世紀からの北方戦争でスウェーデンの統治下に入ったスコーネ地方のデンマーク系住民が統治への態度を否定から肯定へと転換していく経緯にたいする教会と聖職者の貢献などの事例はこのことを如実に物語ります(Knudsen 2000)。

たがこのことは同時に、かつてより教会が担ってきた貧者、病者、高齢者、障害者などへの慈善も、国家が義務として引き受けることを意味します。この点では、一七世紀初頭に開始された慈善は一八世紀末から一九世紀には「コペンハーゲンの救貧計画」(一七九九年)のように、二〇世紀の社会民主主義福祉改革に匹敵するほどの壮大な規模の救貧構想があったとされます(Philip 1947; Sørensen 1998)。しかし、それはまさに徹底して上からの慈善であったことに特徴があるのである。

もう一つは聖職者の役割です。これまでお話ししたことから、彼らは国家と民衆を結合の役割を担い、教区では心ケアとともに、住民管理や生活のケアも担当しました。なにより教会学校は、カ

テキズム教練のように民衆にたいするパターンナな知の注入者だったわけです。だから、聖職者は通常は国家と民衆の情報の仲介者であり、忠実な権力の手先となった者も多かったでしょうが、他方で宗教理念に良心的にしたいが、民衆の擁護者や権力への対抗者となった者もいるでしょう。グルントヴィをはじめデンマークの重要な思想家の多くが宗教的背景をもつのは、このような事情からだといえます。

このことからグルントヴィの思想的タイプを大まかに探りたいのですが、私は仮にここで彼の同時代人の一九世紀ドイツのL・フォイエルバッハとF・ニーチェという象徴的な宗教批判者を引き合いに出したいと思います。ごく単純化しますが、前者は宗教の止揚、つまり宗教という形式を捨て内実をとるという戦略を提示しました。このことによって、神は人間の類的本質の映像とされ、宗教の内実が人間学に担保されました。そこから人間的感覚や愛に基づく自然主義＝ヒューマニズムが取り出されたといえますし、それが福祉思想と親和的であったこと、またマルクスの社会主義がキリスト教との類似性を獲得した重要な要因ともなったことなどを指摘できるでしょう。これにたいしてF・ニーチェは、宗教的および人間的な次元を弱者の怨念として拒否し、永遠の生存闘争の荒野と価値・秩序の自己定立に生きる巨人を描き出しました。ここでは、既成権威はすべて否定されますが、人間の暖かさも共同の絆も、福祉も価値を与えられなかったわけです。

そこでグルントヴィに戻りましょう。彼は誠実なキリスト者であり続けましたが、同時に時代の趨勢を理解し、宗教的権威主義と対抗しました。カテキズムの暗記や試験による知識習得の慣習を子どもの頬の赤いバラを萎れさせる「死せる学校」としてやり玉にあげました。彼は宗教的自由を主張するとともに、宗教的なものと世俗的なもの、教会と学校や国家とを区別し、両者の混同を戒めました。そのさい「喜ばしいキリスト教」というような神学的独自性はあったでしょうが、彼の時代への貢献という面からすれば宗教批判の側面がはるかに大きな比重を占めると思えます。彼は世俗的生活、とくに民主主義的な社会生活に必要な知を信仰からも科学的分析知からも調達せず、「モーゼ・キリスト的直観」、「キリスト的直観」、「聖書の直観」、「歴史・詩的直観」などの圏域にすえました。ここには知と心(ハート)や身体性の契機が結合されます。それを先の宗教批判の二類型とのかかわりでいえば、まさにフォイエルバッハの感性的人間学に比べうる位置取りといえるでしょう。しかも、グルントヴィはフォイエルバッハを越えて感性を歴史的、活動的に把握したといえます。日本を含めていくつかの先進工業国の近代化イメージはニーチェの生存闘争の思想に圧倒的影響を受けていますが、デンマークではもうひとつの知の世俗化パターンが深く定着しています。このこともまた、なぜこの国で高度な近代化と寛厚な普遍主義福祉制度が併存するのか、その秘密を解く思想的な鍵になると思えるのです。

三 経験の原理と常識過程

以上、信仰から知への展開にかかわってお話ししましたが、次に、グルントヴィの認識論のスタンスにふれたいと思います。ところで、私は一九七〇年代に哲学を勉強しはじめたのですが、そこには何をおいてもカントからヘーゲルへのドイツ観念論哲学の巨峰が立ちはだかっていました。それは少し後には、フッサールやハイデガーのそれに変わったかもしれませんが、しかし、いずれにしてもこれらの巨峰を征服するには、長期にわたる忍耐、努力、根気……が必要で、世俗内禁欲によって難渋なドイツ語原典の一字一字と格闘する修道士のような生活を強いられたことを覚えています。世間知らずの私は、この哲学の理解が森羅万象の透徹した把握と同義であり、混乱と墮落に満ちたブルジョワ社会に人間的理想を叩き込むことになるかと主観的に確信していました。後

になってようやく気づいたのですが、グルントヴィが非難の第一の対象とし、「死のための学校」と考えたのは、このような学問的慣習の支配する世界でした。この慣習が研究者だけのものであればそれなりの必要性もあるでしょう。しかし、それが子どもから大人までの知的世界全般を被っているのですから問題です。「生のための学校」といわれるフォルケホイスコーレは、何よりこのような知的慣習を転覆し、地に足をつけた別の知的慣わしを打ち立てることにありました。このことは今後もっと突っ込んで研究課題にしたいところですが、ここでは「経験」を価値とする常識(健康な理性)の哲学にふれたいと思います。

さて、グルントヴィは次のようなという詩片を残しています(Grundtvig 1857)。

『手と口、それがすべて』
しかし、それらは諸部分として
みごとに相互作用する」

「手」は事物をとらえ、また事物に働きかけるという意味で、人間と世界との交渉の中項にあるものですが、それは労働や作品の制作(ポイエーシス)とった人間の能動性をも象徴しますし、さらに知的、文化的な意味で「とらえる」、「概念把握する」といったさいに比喩的にイメージされます。それは人間が外的世界と交渉するさい、能動性と受動性が交差する人間にとっての本質的な器官なのですが、要所は「手」が外的世界と感性的交渉を行うとしても、それは純粋に感性的ではなく、そこにすでに精神が働いていること、「手」において物的なものと同様の精神的なものが浸透し、また浸透させながら、働いていること、このようなイメージがポイントかと思います。こうして心身二元論の固定化を克服する仕方であらされた「手」は、感覚的、認知的活動であれ、労働や芸術的制作活動であれ、言語的、精神的活動であれ、その中心に位置します。これは人間と動物を区別する最有力な器官とされたのです(Grundtvig 1817a)。

もう一方の「口」はどうでしょう。それは味覚という以上に「ことば」と結びつけられますが、一方で対象認識を表現する器官であるとともに、日常的な伝達によって、人々の共同化を可能にします。さらに、「口」はたしかに「手」よりもいっそう精神的なシンボル世界に直接的にかかわりますが、しかしそれでも物理的な音声記号や文字記号に制約されます。それはやはり純粋な意味、純粋な精神ではありません。もちろん、純粋な物理的な音声でもない。ルソーが最も原初的な言語の形態とした泣き叫びのような感情表現も、そこにはやはり精神的意味が含まれています。こうして、「手と口」に仲立ちされ、「手と口」の相互作用的交渉によって、複合的世界と交渉し、架橋する人間的世界が存立しているというのがグルントヴィの理解だと思えます。

こう見てくると気づくことですが、語弊がありますが、グルントヴィの認識、知識論はラディカルな折衷主義といえるように思えます。それでも、無原理、無原則ではありません。若い時代から彼は「見知っているからといって認識されているわけではない」(ヘーゲル)とするような観念論の思弁に反発し、「経験されていないものは正しく見知られていない」(Grundtvig 1817b)と喝破していました。この意味では、彼は明らかに経験論に立脚しています。するとここでは、知の起源はあくまで、白板に刻まれるような感覚・知覚的情報、および精神的情報です。その意味で、知と客観的対象との一致は前提です。しかし、グルントヴィはこの知識対応説だけでなく、知識合意説も主張し、いわゆる知の共同的性格にさえ歩を進めます。つまり、知の正確な対応とつても相互的な

検証が求められますし、それに基づく知の活動的役割が提唱されます。それは「健康な理性」とか「常識」といわれるものであり、彼はそれを「人々の口元を介する明瞭で健康な、つまり正しい諸概念のための能力」(ibid.)として、学問の不可欠な基礎とするのです。「手と口」はこのような意味での知の最高のメディアであり、それらによって経験され、検証され、常識を共有することこそ知の習いなのです。ちなみに、グルントヴィは「理性の法廷」(カント)や「世界史の法廷」(シラー、ヘーゲル)を高唱するドイツ哲学にたいして、「常識の法廷」「公衆の法廷」といった比喻で権威主義に対抗し、知の民主化を図ろうとします。やや飛躍はありますが、私たちはこのことから、デンマークの知的世界が、学校であれ、社会であれ、福祉の現場であれ、政治の場であれ、多様な社会的圏域で常識を形成し、常識を向上させることを通じて、知に強力な人間結合機能を担わせていることに気づくと思います。一見すると、グルントヴィとは無関係に思われる脱原発の合意も、科学的応用にかかわるコンセンサス会議も、教育や福祉、医療にかかわる公的施設の利用者委員会も、じつに知の運動に着目すると、まさにグルントヴィ哲学の実践と見えてくるのです。

こうしてグルントヴィは知を第一義的に常識(コモン・センス)ととらえました。しかし私はより正確には常識過程といいたく思います。このことに少し補足しましょう。戦前の唯物論哲学者戸坂潤の受け売りですが、常識ということばには二種類の意味がつけまわります(戸坂 1935)。つまり一方で、世間にありきたりの考え、マンネリに陥った考えという意味があります。この意味で私たちは「常識を打破しよう」と勇ましく叫んでみたりします。だが、他方で、「常識を弁えなさい」といういい方がなされます。この意味では常識は人々に共通する規範であり、「とんでも」な考えや行動を社会のなかに回収し、しかしそれから学んで、社会の知的、規範的水準を引き上げ、良好な方向へと進化させる形成的役割です。戸坂はこれを「常識水準」といいましたが、私はこれらの両側面を一連の螺旋的運動ととらえて常識過程と表現したいと思います。とするとグルントヴィの啓蒙思想は、様々な既存の知見を批評し、対立させ、議論させ架橋することで、それらを前方へと進化させる形成的な質をもつことがわかります。これは生命有機体の、といっても多分に人間的なその連続的進化をイメージできます。ですから、グルントヴィはヘーゲルのように知の矛盾や疎外の極点に断絶と飛躍を見る革命の弁証法には批判的です。彼は、フランス革命の諸理念には共感を寄せ、デンマークでの具体化を構想しましたが、しかし暴力的方法ははっきりと退けました。ヨーロッパ辺境に生きた一九世紀人として、彼はそのようなスタイルの進歩主義者だったのです。有名な一文を引用します。

「すべての賢慮による学校制度は進歩的な啓蒙と陶冶形成とを意図して設計されねばならない。(中略)人間はまずもって他の動物のものまねを運命づけられた猿ではないし、さらに、世界の終末まで自己自身を模倣することを運命づけられた猿でもない。人間は数限りない世代を通じて神的な諸力が披瀝され、展開され、解明されるはずの比類のない素晴らしい(不思議な)被造物である。人間は、どのように精神と塵とが浸透しあい、共通する神的意識のなかで開示されるかを示す神の実験である。」(Grundtvig 1832)

四 歴史・詩的直観とその北歐的性格

第三点目は、歴史性にかかわることであり、またその形成的思想という特質にふれたいと思います。たしかにグルントヴィはつねに経験や常識からことがら発想しましたが、しかし彼は平板な経験論者でもトリビアルな日常生活主義者でもありませんでした。すでにお話したように、祖国の

独立と主権の維持、近代化が生み出した地政学的危機への対処がつねに念頭にありました。しかし、そのさい彼は構成的ないし構築的(constructive)ではなく、形成的(formative)なヴィジョンを提供しました。この点はこれ以上は議論しませんが、要するに契約説に依拠するメカニカルな社会構築ではなく、人間的な社会有機体の形成・進化が問題だったのです。そのさい、彼の知が「歴史・詩的直観」(historisk-poetisk Anskuelse)と規定されることは本質的な部分を意味するように思います。それは先にふれたヘイムダルの象徴されるものですが、グルントヴィによればヘイムダルは「地上の分割者にして偉大なる土地測量者(数学者であり地理学者)で、自らの住居をできるだけ天山と同じ高さに構え、(詩的に)はるか遠方を見やるのであり、彼は数百マイル先を独力で見ることができ、(歴史的に)しごく注意深く、『草の生長の音を聞くこと』ができ、そしてまた彼のギャラーホルンないし伝声管(略)によってきわめて甲高く告げ知らせ、音声を数百マイル先に届けることができた」(Grundtvig 1839)としました。

ここで「詩的」とは空間軸において広範囲の直観をカバーし、「歴史的」とは、時間軸において微小な音や声を細大漏らさず聞き取ることに関係づけられ、独自の認識論と歴史哲学とが重ね合わせになっているのです。それはたしかに啓蒙の知であるかぎり、何らかの仕方での個の自立的形成であり、自覚の発達に結びつきます。これは近代の宿命といえるでしょう。とはいえ、グルントヴィは個の自覚の原理を直接的に「コギト」といった理性的直観に求めていません。むしろまずは世界の現実を遍く感知、表象し、詩歌などに表現し、告知する不分明な精神から、不分明だが緊張感の溢れる詩情(ポエジー)から、つまり何らかの共同感情、共同表象からスタートするといえます。そこには鮮明な個人はありません。(科)学者ではなく、吟唱詩人や語り部がこの知の体现者です。その不分明な詩情はしかし何かを示唆し、課題を提起する預言あるいは予感でもあります。ここから、その不分明を解明する人間の知的反省と認識が開始されます。つまり預言や予感は詩歌や物語、芸術作品へと制作的に表出され、さらに理性的、学問的に反省され、それらの活動のなかから「コギト」のような個の自覚が派生し、一方で学者やイデオログの役割が、他方で学生や生徒、読者や聴衆といった役割が分岐するでしょう。しかし、それは総体として、不分明な共同感情、共同表象を明晰な共同知、つまり常識あるいは良識(Samvittighed)へ進展させる過程でのことなのです。歴史・詩的直観とは、大まかにいってこのような人間的社会有機体の同一、分岐、再結合の知的運動だと考えられます。

ちなみに、グルントヴィはこの運動を人間の個体的自覚や成熟の知的過程とただけでなく、そこに人類史の展開過程を重ね合わせました。彼は古代を想像力の時代、中世を感情の時代、そして近代(現代)を知性の時代と考えました(Grundtvig 1817a)。まさに近代は「浅薄な」啓蒙による個の覚醒の時代であり疎外の時代ですから、それゆえにさらに、生の啓蒙による個の成熟、社会化、共同化が課題として問われるわけです。

遺憾ながら現時点で、私はまだこの詩・歴史的直観の論理とプロセスをきちんと跡づけることができていませんが、いずれにしても特徴的なことは、こうした個の自覚が何らかの共同の制度、あるいは人間的社会有機体の制度の上に、つまり「生のための学校」のような諸制度に媒介されて進展することだと思えます。啓蒙はたんなる個人化ではなく、つねに「国民」「労働者」「共同市民」等の制度において社会化、政治化されて展開することに気づきます。この種の制度的個人化はじつに哲学史の上では、個人の発達を人類の精神史と平行させ、即自、対自、即自・対自の三組形式によって把握し、現実次元では「良識」(共同知)によって完結させたヘーゲルの『精神現象学』のテーマにも類比すべきものです。すでに述べたように、グルントヴィはヘーゲルのような理性

主義者ではありません。グルントヴィ研究者のあいだでは彼はむしろ、それぞれの知的契機を垂直的關係としてとらえず水平的にとらえ、また「止揚」關係ではなく、同等の権利をもって並存關係とするヘルダー的史觀に依拠しているというのが定説のようです。ですが、知的枠組みは、私の知るかぎりヘーゲルに酷似しています。ただし、後者からの帰結はおそらく、「知性の上に建てられた」プロイセン国家であり、デンマークでは教養市民層の領導する「国家市民」の社会だったと思われる。これはドイツや日本の近代史の径路とも重なる部分があります。

これにたいしてデンマークでは、すでに述べましたように一八六四年の対独戦争の敗北が教養市民層の知的領導力を失墜させたため、一九世紀末から二〇世紀にグルントヴィ(派)の啓蒙が狭義の学校にも浸透し、また「学校」の枠を越えて一般化したので、デンマークが個に媒介され、かつ水平度合いの高い人間的有機体の社会の実験室となった、既述のことばを用いれば共同社会の実験室となったのではないかと私は推定しています。二〇世紀以降のデンマーク社会の諸現象、諸解題はこの知の枠組を用いるとかなりの部分が理解できると私は踏んでいるのですが・・・。

最後に、「生の啓蒙」の特殊性にふれましょう。グルントヴィが普遍史のなかで人間を扱うかぎり、彼はキリスト者であり、かつ人類的思想家、ヒューマニストです。しかし、一九世紀人の彼はそれ以上に市民社会の思想家というべきでしょう。もっと直截に言えば、ナショナリストでした。なぜなら、市民社会はつねに歴史的刻印を受けるからです。グルントヴィの場合、それは「連合王国」(helstat)であれ、小国国民国家であれ、多分に対ドイツを意識しながら、デンマークの枠内で主権の維持を保障する市民社会、国民社会を立ち上げることが問題だったからです。そのことは明らかに彼の歴史性であり、納得するところもありますが評価に躊躇するところも多々あります。たしかに、さまざまな批判的論点があつてしかるべきですし、後の論者によるこの枠組みの相対化は自然なことといえるでしょう(Koch 1959; コースゴー1993)。

とはいえ、グルントヴィが二枚腰であるのは、彼に異文化の尊重という視点があつたというだけのことでありません(Grundtvig 1836)。それ以上に、彼の国民的思想が、あるいはそれを最大限に拡張して「北方」(Norden)に象徴されるスカンディナヴィア主義が普遍的な人類史に理念的貢献するととらえられていることです。それは要するに、ローマ以来の諸学問の危機や歪曲、それは端的に、暗記や詰め込み、意味不明の外語、空疎な抽象論、数量還元主義などに代表される学問的、知的慣習の歪曲なのですが、その危機を北欧型の知的、学問的慣習が救うというものです。換言すれば、近代の危機や歪曲、人間疎外の克服が北欧の知的慣習、学問的慣習の歴史的使命だとする視点です(Grundtvig 1832)。じつは、私たちが「北欧の社会」、「デンマークの民主主義」、「スウェーデンの福祉」、「フィンランドの教育」・・・に注目し、研修に参加し、また研究していることは、多かれ少なかれ、グルントヴィが一八〇年も前に主張した特殊北欧主義的な啓蒙、知的慣習の具体的成果なのです。それが普遍的地平を開拓したのです。ですから、いま大切なのは小賢しく彼の欠点をあげつらうより、むしろ私たちを惹きつけている思想の普遍的な地平を十全に開示し、正当に評価することではないでしょうか。何より現代の危機や疎外の脱出路を求めて、私たちが北欧に熱い眼差しを向けていることはまぎれもない事実なのですから。

おわりに

いずれにしても、グルントヴィのいう北欧の使命は、偶然の主張ではなく、ある意味ではっきりし

た哲学の上に成り立つものでした。彼は歴史相対主義者でも「ポスト・モダニスト」とでもありません。彼は歴史を、偶然を介して必然が展開し、そこに真理が宿ると考え、その真理の追究を価値としました。それは、「神像」として生まれた人間がその自然な形質を展開する過程であり、とくに近代においては「共通の最善」あるいは公共の福祉に向けて、真理と倫理と美に基づいて形象化することでした。さらにいえば、その論理を自分のものとして自覚し、実践し、制作し、把握する主体的な営みとしてもとらえられました(Grundtvig 1817a)。その意味で彼は歴史をはっきりと「大きな物語」と考えていたのです(Grundtvig 1839)。

お話は以上ですが、それはあくまで私の研究の見取り図にすぎませんので、欠点だけです。しかし、当たらずといえども遠からずという実感もあり、今、進めている翻訳の作業を通じて、徐々に解明したいと考えています。しかし、私は北欧主義者ではないので、この哲学が、私たちの母国でどのような意味と帰結をもつのかという視点を忘れないようにしたいと思います。しばしば外国研究に携わる人が、足元を顧みない空疎な評論家になっているケースに出会いますが、このことはグルントヴィの思想とはまったく別物なのですから。取り留めもないお話で恐縮ですが、これで終わります。ご清聴ありがとうございました。

注

- (1) 同時代人、S・A・キルケゴールに対比するなら、グルントヴィは通常の哲学史で論じる必要もない俗流啓蒙家と考えられてきたかもしれません。しかし、彼は、一九世紀末から二〇世紀以降論じられる生や生活世界を先駆的に論じた人間学的哲学者であったことは、電子版テキストや英訳、独訳、和訳の刊行によって、今後だいに解明されていくと思います。このさい私の視点は三木清の三組形式(基礎経験、アントロポロジー、イデオロギー)からヒントを得ています(三木 1927)。この枠組はきわめて大きな含意があると思うのですが、ここではこれ以上論じられません。
- (2) グルントヴィのホイスコーレ構想は絶対王政下で国王クリスチャン八世の同意を取り付けましたが、一八四九年の自由主義化以降、教養市民層の学校構想に押し切られ、挫折します。しかし、彼の構想かたちを変えながらもグルントヴィ派地方農民によるフォルケリ・ホイスコーレとして一八四四年にユトランド半島のレディンで具体化され伝統を築きました。しかし、そこでは自ずと農民が民衆的陶冶形成の中心になりました。しかし、グルントヴィの構想の力点はどちらかといえば、教師や聖職者、官僚候補者が民衆と交流し、デンマーク語学術によって民衆的な知的世界を獲得することを主眼としています。この構想に近いホイスコーレの嚆矢は、第二次大戦後に神学者H・コックが北シェランに創設したクロレルupp・ホイスコーレでしょう。コックはこのホイスコーレをじつに、デンマークの「共同市民学校」(medborgerskole)と意義づけたのです(Koch 1946; 小池 2007)。
- (3) しかし、私はグルントヴィその人が直接的に福祉国家の思想家だというつもりはありません。グルントヴィには福祉社会の主張はありますが、しかし彼はむしろパターンリズムを批判した市民共同体の思想家であり、国家教会に厳しいだけでなく、福祉国家にもやや厳しい眼を向けていました。その意味で、グルントヴィへの批判や留保があるのは不思議ではないでしょう(Philip 1947; Tjømhøj 2004)。じっさい、グルントヴィの影響を強く受けたグルントヴィ派の人々は、グルントヴィ以上に国家介入一般を嫌悪する自由主義者でした。ただ私の考えでは、グルント

ヴィのような市民共同体を真剣に追求し、物的基礎を含めてリアリティーをもたせるには、全労働者の三分の一が公的セクターに従事するような、ユニヴァーサルな公的福祉制度が必要だったということになると思います。この点に、グルントヴィと社会民主主義モデルといわれる高度な福祉国家とが結果として合流する地点があるのではないのでしょうか。この点の解明も、私の研究目標の一つなのですが、今はまだ十分なことはお話しできません。

参考文献:

- Birkelund, R. (2000), Grundtvigs syn på videnskab og uddannelse af praktiske embedsmænd, i: *Nordisk Pedagogik*, Vol. 20, Nr.2.
- (2001), Grundtvig og Demokratiet: Om oplysning, dannelse og demokrati, i: O. Korsgaard (red.), *Poetisk demokrati: Om personlig dannelse og samfundsdannelse*, Gads Forlag.
- Campbell, J. L. et al. (2006), *National Identity and the Varieties of Capitalism: The Danish Experience*, McGill-Queen's University Press.
- DFS: Dansk Folkeoplysning Samråd (2011), www.dfs.dk.
- Grundtvig, N. F. S. (1817a), *Om Mennesket i Verden*, Poul Kristensen. (小池直人訳『世界における人間』風媒社、二〇〇九年)。
- (1817b), Om Videnskabeligheds Forhold til Erfaring og sund Menneske Forstand, i: H. Begtrup (red.), *N. F. S. Grundtvigs Udvalgte Skrifter*, Bd.3.
- (1832), Universal-Historisk Vidskab, i: Kristensen, G. og H. Koch(red.), *N. F. S. Grundtvig Værker i Udvalg*, Bd.4. (「普遍史的哲学・学芸」、小池直人訳『生の啓蒙』風媒社二〇一一年)。
- (1834), *Statsmæssig Oplysning*, Nyt Nordisk Forlag Arnord Busck. (「国家的啓蒙」、『生の啓蒙』風媒社)。
- (1838), Skolen for Livet og Akademiet i Soer: Bogerlig Betragtet, i: Kristensen og Koch(red.), *N. F. S. Grundtvig Værker i Udvalg*, Bd.4. (「生のための学校とソーアのアカデミー」、小池直人訳『ホイスコーレ(上)』風媒社、近刊所収)。
- (1839), Om Norden videnskabelige Forening, *N.F.S. Grundtvig Værker i Udvalg*, Bd.4. (「北欧の学問的連携」『ホイスコーレ(上)』近刊所収)。
- (1839), Oplysning, i: Kristensen og Koch(red.), *N. F. S. Grundtvig Værker i Udvalg*, Bd.8. (「啓蒙」『生の啓蒙』所収)。
- (1856-71), *Taler paa Marienlyst Højskole*, Gyldendal.
- (1857), Nyårsdagen, i: S. Grundtvig(ud.), *N. F. S. Grundtvig Poetiske Skrifter*, Bd.8.
- Knudsen, T. (2000), Tilbliversen af den universalistiske velfærdsstat, i: T. Knudsen (red.), *Den nordiske protestantisme og velfærdsstaten*, Aarhus Universitetsforlag.
- Koch, H. (1946), Ved Krogerup Højskoles Indvielse, i: *Højskolebladet*, 13. December.
- (1959), *N. F. S. Grundtvig*, 2. udgave, Gyldendal. (小池直人訳『グルントヴィ』風媒社、二〇〇七年)。
- (1960), *Om Tolerance*, Gyldendal.

- Korsgaard, O. (2011), Grundtvig's Philosophy of Enlightenment and Education, in: E. Broadbridge (ed.), *The School for Life: N. F. S. Grundtvig*, Aarhus University Press.
- Nielsen, K. and O. K. Pedersen (1988), Negotiated Economy: Ideal and History, in: *Scandinavian Political Studies*, Vol.11-2.
- Philip, K. (1947), *Staten og Fattigdommen*, Gjellerup Forlag.
- Steffens, H. (1905), *Henrik Steffens' Indledning til filosofiske Forlæsninger i København 1803*, red. v. Heffding, H., Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag.
- Sørensen, A. B. (1998), On Kings, Pietism and Rent-seeking in Scandinavian Welfare State, in: *Acta Sociologica*, Vol.41.
- Raffnsøe, S. og O. K. Pedersen (1993), Konflikt og Samhørighed: Demokratiske Transformationer, i: *Philosophia*, 23-4. 小池直人訳「コンフリクトと共属性——民主主義的転形」SIS/GSHI Discussion Paper No.02-1、名古屋大学、二〇〇二年。
- Tjømhøj, H. (2004), Den ufolkelige Grundtvig, i: *Kristelige Dagblad*, 24. maj.
- 小池直人 (2007) 「ハル・コックのグルントヴィ論」(コック『グルントヴィ』風媒社、所収)。
- (2009) 「生の啓蒙と常識過程——グルントヴィ『哲学・学芸』の基本性格」(名古屋大学社会文化形成研究会『社会文化形成』別冊1)。
- (2011) 「岐路に立つ柔軟保障(フレキシキュリティ)——デンマーク的性格とその変容」(『社会文化形成』第三号)。
- (2011) 「環境保全型福祉国家と〈農〉の基礎経験——グルントヴィ哲学の射程」(尾関周二他編『〈農〉と共生の思想』農林統計出版)。
- (2012) 「デンマーク福祉国家モデルとその思想」(『社会文化形成』第四号)。
- コースゴー、O. (1997) 『光を求めて』(高倉尚子訳、東海大学出版会、一九九九年)。
- コースゴー、O. / 清水満編 (1993) 『デンマークで生まれたフリースクール、フォルケホイスコーレの世界』(新評論)
- タニング、K. (1972) 『北方の思想家グルントヴィ』(渡部光男訳、杉山書店、一九八七年)。
- 戸坂潤 (1935) 『日本イデオロギー論』(岩波文庫、一九七七年)。
- 三木清 (1927) 「人間学のマルクスの形態」(『三木清全集』第三巻、岩波書店)。